

「マスクを外して下さい」

小宮玲子 桜美林大学大学院

ろうの方ががんになったとき、意思の疎通の困難さからくる不安について、考えさせられた講義でした。そこに見えてきた課題として、コミュニケーションが挙げられます。

私は、以前、アパレルの企画室に勤務していました。当時のサンプル縫製の担当者は、約15人位だったと思いますが、ほとんどが聴覚障害者でしたので、その時のコミュニケーションについて考えながら講義を聞いていました。

企画室でデザインシパターンにした物からサンプルを創ります。その際、コミュニケーションを何度も図ります。図に書いたり、時に部分縫いをして見せたりしながら、コミュニケーションをとっていましたが、特に不都合を感じたことはなかったです。健聴者である外注さんをお願いした時でも、かなり何度もコミュニケーションをとりながら仕事を進めていました。私は不都合を感じていませんでしたが、サンプル縫製の担当者はどうだったのかなあ、と思いました。ただ、仕事柄か、お互いにはっきりと意見を言い合う体制だったので、多分お互いに不都合があれば言いあって解決していたのではないかと思います。

長年一緒に仕事をしていた人と、初対面の病院職員との違いもあると感じました。

印象に残った言葉として「マスクを外して下さい」がありました。

私が認知症の人の支援をする時に、言葉で話しているのと思っていることが違うと感じる時があります。例えば怒っている人が、実はとても困っていると感じて支援する場面や、笑っている人の中に、不安そうな様子を見る時があります。その時には、言葉や表情ではなく、その人自体が醸し出すものから感じ取ってコミュニケーションをする時があり、その困っている理由や不安の要因はたいてい、「ああ、そうだったんだ」と後からついてきます。

乃木坂スクールの帰宅時に電車の中で私の目の前に座っていた人が、スマホを見ていました。その人を見ている時に、「この人、駅について慌てて降りるわ」と感じました。その人の表情はスマホを見ていたので無表情でした。予想通りに武蔵境の駅で、慌てて降りていき、「やっぱりね」と思いました。

アパレルに勤務していた時には残業が多く、ある日20時になり、数人でコーヒブレイクをした時のことです。自販機の前にゴキブリがいて一人の人が「ゴキブリが死んでいる」と言い、私は「死んだふりをしているのよ」と答えました。その人がゴキブリのそばでドーンと足音を立てるとそのゴキブリは、クルクルと回り、逃げようとなりました。「ほらね。死んだふりをしていたでしょう」と話したことを思い出しました。私はゴキブリを見た瞬間に、必死に死んだふりをしていると感じました。

「マスクを外して下さい」という言葉を聞いて、私は、身体全体から醸し出すものでコミュニケーションをとるタイプなのかと、自分を振り返る機会を得ました。